

南信州の山あい位置する昼神温泉は、湯が湧いてからわずか50年ほどの新しい温泉郷。
けれどこの地には、季節ごとに神が入れ替わりながら湯屋を護るという不思議な伝承が息づく。
神々に導かれ、幽玄なる神話の世界へ



冬の間、湯屋権現の分霊として温泉郷を護るとされる湯屋守様。藁で制作されたその姿は小さきまがまだが、円錐形を基本とし、邪気が入ってこないよう獅子舞のように目を見開き、大きく口を開けた顔を持つのが特徴。



江戸時代に鹿が湯に浸かっていたとされる「湯の瀬」付近に立つ湯屋権現社の碑。昼神温泉郷の湯屋の歴史はここから始まったとされる。後に阿智神社近くの昼神公園に新たに社殿が建てられ、信仰の対象として崇められている。そんな湯屋権現が護る温泉郷は「美人の湯」として知られ、阿智川の清流を挟み温泉旅館が軒を連ねる。



豊かな南信州の自然に包まれて湧く昼神温泉。湯の守り神が季節ごとに交代するという伝承が、今も息づいている。神話と現代が寄り添うこの地で、旅人は心も身体も深く癒されていく。

南信州を貫く「東山道」沿いには、今も多くの神話や伝説が語り継がれている。奈良・平安時代に整備された東山道は、近江国（現在の滋賀県）から陸奥国（現在の東北地方）を結ぶ幹線道路のひとつであり、その最大の難所とされた神坂峠の麓に、昼神温泉郷がある。

「昼神」の名の由来にはいくつかの説がある。ひとつは、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）がこの地で荒ぶる山の神をニンニクで鎮めたという故事にちなむもの。ニンニクは古く「蒜（ヒル）」と呼ばれていたことから、「昼神」という地名が生まれたという。また、天照大御神を岩戸から外に導き出した知恵の神・天八意思兼命（アメノヤゴロオモイカネノミコト）を祀る阿智神社がこの地に鎮座することになんて、「昼を取り戻した神」を祀る地という意味で「昼神」と名づけられたとする説もある。いずれにせよ、古代から人々の祈りと往来を受け入れてきた東山道沿いの要所にふさわしい名であることに違いはない。

昼神温泉の歴史は、意外にも新しい。1973年（昭和48年）、長野県飯田市から岐阜県中津川市にかけての鉄道敷設工事中、偶然に湧き出した温泉が昼神温泉郷のはじまりである。だが、その地にはそれ以前から湯屋が存在し、「湯屋権現」を祀る文化があった。古くは武田信玄の隠し湯のひとつだったとされ、江戸時代には傷を負った鹿が湧水で傷を癒しているのを見た村人がこの水は霊験あらたかだとし、湯場を設けて湯屋権現を祀ったという。明治の大雨により湯場は失われたが、昭和の再発見によって湯の恵みはよみがえり、南信州最大の温泉地として再びその歴史を歩み始め



人々の 厄を喰らう神 「ヤークー様」

雛飾りの中央に鎮座する得体の知れない物体。これは「ヤークー様」と呼ばれる神様だ。その年の干支をモチーフに藁でつくられ、願いごとが書かれた人々のおれで覆い尽くされている。「当館では湯屋守様とは別に『ヤークー様』も祀ります。すべての人や地域の厄災からお護りいただく神様です」。そう話すのは地元を代表する旅館「石苔亭いしだ」管理統括室の井口洋氏。同館では毎年「二千体雛飾り」を飾るのが定例だが、令和改元の節目に「未来へとつなぐ神様」をお迎え（考案）することになった。命名は宮崎駿監督。地元の小学生から公募した中から「厄を喰らうからヤークー」を選んだそうだ。新たなものを創造し、やがてそれは歴史となっていく。「神ぐ和しの里」と呼ばれる、この地らしい神様だ。



全国各地の知られざる魅力を
ダイナースクラブの
目利き力をもってお届けします。

※本誌76～77ページをあわせてご覧ください。



上：昼神温泉郷を含む阿智村は、環境省による全国星空継続観察で「星がもっとも輝いて見える場所」に認定された星空が美しい地域。神坂峠付近の園原からは、月に照らされた段々畑のあぜ道越しに春の星が輝いていた。



ルを超える火柱となって夜空を焦がした。古くから炎は穢れを祓い、生命を再生させるものとされてきた。その火を見つめる人々の間には、祈りの空気が流れていた。その後、夜空には盛大な火花が打ち上がり、会場は歓声に包まれたのだった。燃え尽きたあとの黒い炭は、「自分以外の人に塗ってもらおうと無病息災が約束される」と言われている。神が姿を変え、再び人々の暮らしの中に溶け込んでいく。こうして湯屋守様から湯屋権現へと役目が戻され、昼神温泉郷には本格的に春が訪れる。お焚き上げの儀が滞りなく終わった後、再び雨が降り出した。やはり不思議な力が昼神温泉郷にはあるようだ。神話と祈りがそっと寄り添うこの地の湯は、訪れる人々の心と身体を不思議な力でゆっくりとほどこしてくれる。

Information

昼神の御湯

降神祭・分湯式：2025年12月01日（月）
お焚き上げの儀：2026年03月07日（土）
お問い合わせ：阿智☆昼神観光局
電話0265-43-3001



各旅館から朝市広場につくられた結界内に移動してきた湯屋守様。神事とされるお焚き上げの儀は神職により進行され、厳肅な雰囲気漂う。湯屋守様に火が灯されると、火柱とともに火の粉が夜の空に舞い上がる。昇神によってその年の湯屋守様の任務が終了する。



季節は巡り、3月。春の兆しを感じられる昼神温泉郷では、「お焚き上げの儀」によって湯屋守様から湯屋権現へと交代する神事が執り行われる。祭りが始まるのは夜の8時から。この日は朝から小雪が舞い、夕方には冷たい雨へと変わっていた。だが、「昼神は神に護られた地だから大丈夫」と語る地元の人言葉どおり、儀式の直前に雨がびたりと止んだ。

前日から集められた大小10体の湯屋守様が朝市広場に並び、神饌や御神酒が供えられる。阿智神社の神職によって清められた場に、いよいよ火が入る。藁でつくられた湯屋守様は、濡れていたにもかかわらず勢いよく燃え上がり、炎は10メートルに達した。春の兆しを感じられる昼神温泉郷では、「お焚き上げの儀」によって湯屋守様から湯屋権現へと交代する神事が執り行われる。祭りが始まるのは夜の8時から。この日は朝から小雪が舞い、夕方には冷たい雨へと変わっていた。だが、「昼神は神に護られた地だから大丈夫」と語る地元の人言葉どおり、儀式の直前に雨がびたりと止んだ。

た。

pH 9・7の強アルカリ性を誇る昼神の湯は古い

角質を取る効果があり、肌が潤う国内屈指の「美人の湯」として知られている。その湯を支える精神的な柱として、湯屋権現への信仰が、今もなお地域に根づいている。そして、この湯屋権現にまつわる風習が「昼神の御湯」である。昼神温泉では、12月になると湯屋権現が3カ月間、温泉に浸かって疲れを癒すとされる。その間、代わりに各旅館の玄関口で温泉を護るのが「湯屋守様」と呼ばれる藁でつくられた神様だ。湯屋守様は旅館ごとに制作され、湯屋権現が不在の間、各旅館の玄関口に鎮座し、湯屋権現の留守を補う存在として迎えられる。この風習が「昼神の御湯」として受け継がれ、訪れる人々に特別な時期であることを静かに伝えている。

「湯屋権現が温泉に浸かる冬の間には昼神の温泉に入ることは神様と混浴したとみなされ、無病息災のご利益があるとも考えられています。神様が浸かる温泉なので『御湯』なのです。そう話すのは、昼神の御湯実行委員会の委員長を務める伊壺真一氏だ。

季節は巡り、3月。春の兆しを感じられる昼神温泉郷では、「お焚き上げの儀」によって湯屋守様から湯屋権現へと交代する神事が執り行われる。祭りが始まるのは夜の8時から。この日は朝から小雪が舞い、夕方には冷たい雨へと変わっていた。だが、「昼神は神に護られた地だから大丈夫」と語る地元の人言葉どおり、儀式の直前に雨がびたりと止んだ。